

「存在への郷愁」を探し求める人

青柳俊哉第二詩集『球体の秋』に寄せて

鈴木比佐雄

棘

生成の初め

黒い鋭利な一本の直線

何ものも共有しない純粹単独の閃光がつらぬく

出生してもなお

脳髓に深く固着している徴

人間の黒い棘の栄光

1  
青柳俊哉さんは、一九五七年に福岡市に生まれ育ち今も故郷に暮らしている詩人だ。二〇〇七年には第一詩集『結晶』（二十六篇）を刊行した。その詩集を読んだ印象を思い起こしてみると、伊東静雄に通ずるような単独者としての孤独感を抱えながら、存在することへの悲しみが根底に流れていると思われた。そして古代から続く人間存在人間が作り出した事物、自然や宇宙の果てしなさなどの、存在の驚きを語り出してしまう激しい衝動を感じた。第一詩集からそのような重たい存在への問いをテーマとする本格的な詩人がいると私の心に刻まれていた。その第一詩集の一章二篇の冒頭には、次の短い序詩が置かれてあった。青柳さんの第一詩集の試みを辿ってみた。

「生成の初め」に立ち帰る志向性の強さが、青柳さんの詩の最も特長的なところだろう。その問いは「黒い鋭利な一本の直線」であり、「純粹単独の閃光」なのだという。その閃光が「人間の黒い棘の栄光」として自らの内面に深く刻まれていると青柳さんは書き記している。そんな「人間の黒い棘の栄光」を辿っていったのが、詩集『結晶』の試みだったろう。この在ることへの驚きが、「黒い棘」として絶えず反復されて、存在の悲しみに転

移して一篇の詩に結晶されてきたのだろう。さらに次の引用する一章の二篇の「静寂の園」に私は徹底して存在論的に世界を問うていく姿勢に、そうとしか生きられない青柳さんの何か宿命を感じさせる詩法が立ち昇ってくる思いがする。

静寂の園

熱い肉体を金属で武装し

欲望と観念にみなぎる手で

真空に神の風景を彫る

壮大な鏡の肢体をもつその神

陰影をかさねるごとに希薄になるその神

真空に吊るされた鏡の夜が

太陽に斬首され

静寂の園へ崩落する

静寂の森はうすい

静寂の大地はもつとうすい

わたしたちの郷愁は森より大地よりもつとうす

い

風景は紙のように

わたしたちの肉体から剥がれてゆく

わたしたちの金属の指は

静寂の森にふれることができない

わたしたちのガラスの足は

静寂の大地をふみしめることができない

わたしたちはこの純粹世界の天使たちから

たえず監視され、脅迫されている

わたしたちの存在の徴は

たえず疼き、消えることがない

この園において

わたしたちは

ただ一つの禁忌・拒絶以上の非存在である

人間たちが金属を発見し農機具や武器を作り部族や国家を生み出すと同時に、部族や国家を統合するために宗教を政治に利用していく。それは神殿を作るような「真空に神の風景を彫る」試みだったろう。青柳さんは本来的に人間の内部に刻まれている存在への郷愁が「静寂の園」にあったことを想起している。しかし部族や国家によって「静寂の森」は、在りかを隠されて、いつしか「希薄になるその神」へと拘りかえられてしまっている。そのことに深い失望を感じて「静寂の森はうすい／静寂の大地はもっとうすい／わたしたちの郷愁は森より大地よりもっとうすい／風景は紙のように／わたしたちの肉体から剝がれてゆく」と語っている。青柳さんの詩篇は、「存在への郷愁」という観点で読めば、とても解りやすい詩だと私には感じられた。そして青柳さんは「わたしたちの郷愁」や「わたしたちの存在の徴」が喪われてしまっているが、私たちの中に「たえず疼き、消えるこ

とがない」と告げている。それゆえに青柳さんは、私たちが「ただ一つの禁忌・拒絶以上の非存在である」ような「存在への郷愁」を探し求めざるを得ない存在なのだと言っている。

青柳さんの詩篇は、ハイデッガーが論じたドイツの詩人たち、ヘルダーリン、トラークル、リルケや戦後のパウル・ツェランなどを読み込んでいった観点から見れば、存在論的な詩人の系譜の中に連なることになるだろう。例えば次のⅢ章の詩「アザミ塔」などには、一輪の花の中に「宇宙の結晶」を透視してしまっている。青柳さんの存在論的な詩篇の中でも魅力的な詩「アザミ塔」を引用してみたい。

#### アザミ塔

（風景のはりつめた  
うすい膜のひずみから  
生成し消えてゆく

しずかに結実している

宇宙の結晶

（雲や水のうつろいのように  
（みじかい光の振幅に生まれ  
（背後にみつ無辺の母性の神秘にたえ  
（惑いのうちに消えてゆく  
（生の結晶

地上の欠落をいだくように立つ  
一輪のあざみの花  
あるものの純粹な私たちを現し  
小雨のふる春の野辺の  
ひそかな小川の土手に立ち  
石のような青い目で  
夢みる水のながれと  
生物のささやく世界をみつめている  
よろこびもなく、かなしみもなく  
人間のよろこびも、かなしみも  
深く内包し、沈潜し  
無限の空の反映を  
青い血潮に湛え

青柳さんの存在論的詩篇は、一輪の野草のアザミの花にあらゆる存在が殺到して重なり埋めこまれていった「宇宙の結晶」を見てしまうのだ。その意味では見えない過去の存在の命の流れを感じ取り、大気の流れ、光や雨が降り注いでくる地上の動きを察知した果てにアザミという存在の現われの総体を再構築してしまった。ふだんは気付かなくとも存在物や存在者の存在が突然明らかになる瞬間を青柳さんは記述しているだけかも知れない。その意味では青柳さんの内部意識では、心象のリアリズムを記述しようと試みているのだろう。

#### 2

第一詩集から四年が経ち、第二詩集『球体の秋』（五十四篇）が刊行された。第一詩集は、青柳さんの原点となった詩集であることは間違いない。

それを踏まえて、『球体の秋』には、より豊かな存在論的な問いが観念的だけではない、肉体を通して五章にわたって花開いていると感じられた。I章「古代の朝」（六篇）には「生成の初め」とも言える「黒い土」が現れてきてその意味を豊かに問うている。冒頭の「古代の朝」を引用する。

#### 古代の朝

新緑のかぐわしい古代の朝に ひっそりと雨がふっている 所々に薄い緑の光がさしている  
人間が生まれる前の黒い土が 柔らかくほぐされ 雨を吸っている 美しく整えられた黒い畝と緑草の中を少女のピンクの傘がひらいて舞って行く 空から落ちる水滴を 黒い土が吸いこむ 薄い緑の光がさして ぬれた緑草が輝きだす この古代の情感を 人間が生まれる前の神性を 人間の子が温かく彩りながら 靈歌を奏する

私はこの詩を読み、古代の朝に降り立ち、古代の田畑の朝の散歩をしているような清々しい気持ちにさせられた。「人間が生まれる前の黒い土」が、さも当たり前のように眼の前に出てきて、「柔らかくほぐされ 雨を吸っている」のだ。青柳さんはその情景を「古代の情感」として私たちに差し出す。そして青柳さんはそんな「古代の情感」であり「人間が生まれる前の神性」を人間の子の「靈歌」によって甦らせようとするのだ。きっと青柳さんは子供のころに故郷の田畑の畝を歩きながら、「古代の情感」の中に核心である「神性」も感じていたのだろう。I章には、「黒い土」という詩があり、冒頭の六行を引用してみる。

一月 荒れた真冬の田圃を鋤く  
強い小さな緑草が髭のように生えている  
夏草が白く細く大量に枯れている  
黄色い苔のようなものも生えている

それらの生と死をのみこんで

十分にゆたかになった土の内部をひらいてゆく

真実を直視しそれを語るべきだという思いが溢れている。その詩「否定」の冒頭の五連を引用したい。

#### 否定

古代から あるいは人間が人間となったときから 山も海も 空も川も 地上は人間の死でいっぱいである 名もないものたちの 痕跡もなく死んだものたちの死でいっぱいである

就職した頃 事務所の机に不定期に回覧される 行旅死亡人の通知があった 姓名も年齢も住所も 死因さえもわからない死者たちの記録 発見されたときの死の状況だけが記されている 地上から生の痕跡を抹消したかのようなかれらの死に私は惹かれていた

青柳さんは「黒い土地」の中に死んだものと同じようなものがあるのが同時に存在することを知らず。「黒い土地」である故郷が「生と死」が絶えず混在しせめぎあう場所であることを子供のころ直観してしまったのではないか。その厳粛な事実の前で少年であった青柳さんは、世界とは何か、人間とは何かという哲学的なテーマを抱え込んでしまったのではないだろうか。「黒い土」を眺めることによって、「古代の朝」を思い、また「生と死」の根源的な問いを抱いていた青柳さんは、きっとこのような存在論的な詩を書かざるを得ない詩人であったのだ。次にI章の中に十四ページにわたる「否定」という長編詩がある。この詩論的な長編詩は、青柳さんの子供時代の体験のモノローグから始まり、長年思索してきた世界観、人生観を率直に語ったものだが、その根底にはこの世界の

私は五歳の時には自殺の妄想があった 若い頃から灼けつくような野垂れ死にへの衝動があっ

た かれらの死の背後に立ち上る自己否定の氣

配が私の内部にあった 存在を消し去ること  
生の痕跡を消し去ること

〔否定〕の前半)

一九六〇年代初め 福岡市内の西新商店街 野菜売りのリヤカーや八百屋や魚屋などが並ぶ商店街の 湿った暗い路地裏に襦袢はちまきをまとった男の人が正座をしていた その人の膝先に私の母はそっと小銭を置いた 幼年の私はその人を生んだ母の心を思い その母を愛おしんだその人の幼児期の心を思い 痛切な悲しみに涙があふれた

幼年期 悲しみはいたるところに降っていた  
私は悲しみにふれると その人が死んでしまう  
ような気がして そっとその人のあとを追った  
りした そして雪が消えるように 人の心を憂  
うる悲しみは年齢とともに私から失われていっ  
た

この世界のあらゆる土壌が、人間を含め生あるものたちの死で満ちている墓場であるという認識を青柳さんは持ち続けている。またこの世界は実は生きていることが例外で、死んだものたちの痕跡を忘れていくに過ぎないのではないか。そのように恐るべき認識を青柳さんは奥底に抱き続けている。また自分の内面にも「行旅死亡者」即ち「野垂れ死に」への衝動願望があったことを告白している。「存在を消し去ること」や「生の痕跡を消し去ること」という世間では否定されていることを、青柳さんは心の奥底で肯定していたという。なぜいつの時代も野垂れ死にや孤独死が絶えないか、という問いを発するならば、青柳さんはこの後に鋭い解答をしているという思いがしてくる。人間は反自然的存在であり、人間だけの欲望で自然を支配できると過信し、大規模な開発によって自然を破壊し尽くしても恥じることはない。恐るべき傲

慢な存在者であることに恥じ入り自らの存在を否定して消えて無くなりたいたいという人間たちがいても不思議ではない。青柳さんは人間が大人になるにつれて愛を喪失していく存在だともいう。その意味で人間の絶望や不安や虚しさをこの長編詩「否定」は、誠実に直視しようとした力作だと思われる。そして人間が肉体や名誉に関わる欲望から離脱していくために、否定性を媒介にしながら、新たな精神の世界観を構築しようと詩作している。

Ⅱ章「夕映えの窓」(十三篇)は、青柳さんの家族・親族・友人との痛切な関係性、故郷の自然・歴史的事物から受けた交感などが書かれて詩篇群だ。特に印象的な詩篇は「白い像」、「紋」、「三輪車」などで、三百年以上も先祖を辿り、その関係する史跡である鄙びた神社に参拝する時の、青柳さんの複雑な心の動揺が詩篇の真実を物語り、詩の魅力を増している。また幼なじみの死を悼む詩「Kに」も、あたかも自分が死んでしまったかのような深い悲しみを書き記している。

Ⅲ章「球体の秋」(十三篇)は、世界が在ることの根源的な虚しさに徹底的に傾斜していく詩篇だ。その最深部まで降り立った時に、青柳さんはそこから浮遊して未知の観念的な世界をあたかも実在のように物語り始めるのだ。故郷世界から孤立し、自己の出自を嫌悪し、内面が崩壊する寸前であっても、生きることを決してやめないのは、苦しみぬいた魂が美しいものを欲しているからなのかも知れない。Ⅲ章冒頭の「原野」や二篇目の「花のしるし」も痛切な詩篇だが、私は「紫陽花 一」を読んで自己の宿命をここまで詩作した青柳さんの誠実さに深い感銘を受けた。この詩を引用したい。

#### 紫陽花 一

庭の小さな風車が風に鳴っている  
暗い緑のなかに  
紫陽花の白い花がぼんやりはなやいでくる  
夕闇の水田に

生きているほそい稲の葉がゆれ  
遠い田圃いちめんに  
雑草のかすかな白い花が無数にゆれている  
.....

どこか遠いところから連れさられ  
私へと氷結した不明の雪たち  
私の内側にびつたりはりついている  
みしらぬ魂

私はこの土地に生まれ  
近親婚の続いた家系の暗い血をうけついでが  
心はこの土地と血になじまず  
現実からはなれた虚無的な意識の  
透明な袋のような空間に生きています

生まれるまえから附着しているような  
生の不安と死へのしたしみは  
いまも根雪のように私にふりつもる

故郷の中で生きざるを得ない「私であること  
くるしみ」を独白する青柳さんの思いは、読む  
ものの魂にきつと触れてくるだろう。

詩集のタイトル詩「球体の秋」は、秋の夕暮れ  
の透明感から「光と影の境界」が消えた不思議な  
世界を構築してしまった詩だ。この世界の中で父  
子が遊ぶ白いボールは宙へ浮かび上がる。さらに  
カーンと響く金属音が響き渡ると、そのボールを  
持つ父子も空に上昇していく。その夜には満月で  
精霊たちが舞い、月の雫を降らせながら球体の秋  
を祝福するのだ。

IV章「霊蝶」（九篇）は、蝶や石やベンチなどの  
生きものや事物との関わりを通して、命と肉体の  
意味を問うている。肉体を無にしたいという衝動  
を抱える青柳さんしか書けない精神世界が構築さ  
れている。

V章「永遠」（十三篇）は、青柳さんの現時点  
での存在論的視座を抱えた詩篇が集められている。

私は魂を  
このしずかな紫陽花の庭に縊死したい  
私から散り敷いてゆく霊の花片を眺めながら  
そのかすかな叫びをきいていた

紫陽花の花が私のなかへ染みてゆくとき  
私も 紫陽花の花のなかへ染みてゆく  
私であることのくるしみ

紫陽花の花の  
死より深い場所へ溶けだしてゆくように  
私という幻影が  
だれでもない命のもとへ移りゆくように  
.....

いつしか月明かりがさして  
紫陽花の花の内側の  
散り敷いた霊の花片から  
根雪のような魂が白々と明るんでくる

青柳さんは詩作することによって生を承らえてき  
た本来的な詩人である。最後に晩婚である青柳  
さんが我が子に語りかける詩「永遠」を引用した  
い。「この兎の人生が苦しみにみちたものでないこ  
とを願うのである」という最終行は、青柳さんが  
記された最も美しい言葉として永遠に残されるだ  
ろう。存在論的な問いを発せざるを得ない人びと、  
この世に居場所のないという思いに捉われた人び  
となどにこの詩集が読まれることを願っている。

永遠

1

詩稿を読んでいる私のまえに 樹々の葉影がゆ  
れている そのゆらめく影の中に なにかを  
じっとみつめる私の碑が立っている ぬうぼう  
としたのつべらぼうの黒い石の影 その内部に  
ほろんでゆくものがあるとしても 激しい

不安におびえる魂があるとしても その黒い象徴はそれらをのみこみ この時空に深く突き刺さっている この永遠の石の棘 その石の周りを蝶のように影がゆらめいて そのゆらめく影の一秒一秒が 石の内部の私には鋭くひびきわたる生の永遠であった 私の上半身は真冬の温かい昼の陽射しの中にある

2

私の枕もとに 二歳に満たない女の児が眠っている 小さな両手を胸もとに愛らしくそろえて 安心しきって眠っている その幸福な寝顔が 成長し過ぎ去ってゆくこの子の生の 二度と訪れることのない瞬間を刻んでゆく この児の寝顔を美しくみながら 私は幸福をかみしめ その永遠の瞬間を心に刻み この児の人生が苦しみにみちたものでないことを願うのである

青柳俊哉詩集『球体の秋』栞解説文  
鈴木比佐雄

コールサツク社  
2011